林歌子の渡米（1905年～06年）をめぐって*

室　田　保　夫**

はじめに

日本の社会福祉の歴史を見ていくとき、石井十次や留岡幸助、小河滋次郎、渡辺海旭ら、事業や思想との関連において多くの先駆者がいたわけで、「社会福祉は人」と言われる如く、人物史研究として最近、かなり行われてきている。その時、日本の近代における慈善事業・社会事業期において圧倒的に男性が多いことも確かだが、これまで有名でない人々や、あるいはそれを支えた人々に視点を当てると、必ずしもそうとは言い切れない。また最近の女性史研究の進捗にもかかわらず、かつ「社会福祉とジェンダー」といった課題も提起されながら、こと女性についての研究はあまりなされていないのが現状といえようか。

ところで女性の社会事業家に焦点をあてたものとして、従来、五味百合子編集の３冊からなる『社会事業に生きた女性たち』（1973～85、ドメス出版）という著が出されており、それらの著には約50人の女性の社会事業家が取りあげられている。一番ケ瀬康子はその中で、社会事業に生きる女性は３つのタイプがあると論じている。すなわち、創始者、創業者として活躍したタイプ、働き人として社会事業の現場で生きたタイプ、社会事業家としての夫を内側から支えつつ、自らも共労者として生きたタイプの３つである。[1] また窪田暁子は「慈善事業施設の創立を担った女性たち―その組織的・経営的力量の背景に関する若干の考察」という論文で、「新しい慈善事業の創立者、また経営者として現われた女性社会事業家たちは、どのような条件の下にその力を蓄えた人々であったのか。事業創立者の社会的・教育的背景を考察して、わが国の社会事業成立の背景に関する一つの資料を提起しよう」[2] と論じ、その課題に取り組んでいる。最近では『シリーズ福祉に生きる』（大空社、1998～2001）という多数の評伝の中に林歌子もふくめ、山高しげり、矢島楫子、山室機恵子、奥むめお、久布白落実ら女性も多く登場している。しかし個人研究のみならず、社会事業の歴史において、女性の問題をどう対象化していくかという課題、そして「社会福祉と女性」という重要な現代的課題と関連し、今後の研究領域であると思われる。

ここで取り上げる林歌子は1864（元治元）年の誕生で、留岡幸助と誕生の年を同じくしており、明治、大正、昭和と同時代を生きた人物でもあり、いってみれば近代日本の社会事業の歴史を背景に大きな課題を背負った女性でもある。上述の一番ケ瀬の３タイプで敢えて言うならば、林は前の２つを併せ持つタイプであろうか。従来、林歌子の研究については次章でも触れるが、石月静恵が婦人矯風会の文脈で研究している一方、社会福祉の分野からは、簡単な伝記以外、西村みはるが『社会福祉実践思想史研究』（ドメス出版、1994）の中で初期の博愛社とその功績の多かった小橋勝之助研究に関連して、林の初期にふれているにすぎない状況である。

筆者も２年前から博愛社の資料整理の作業をする中で、博愛社の機関紙の諸論文や林歌子の日記類の資料をみながら、林や小橋実之助について少しづつではあるが、興味を覚えるようになってき

*キーワード：林歌子、日本キリスト教婦人矯風会、博愛社、孤児院
**関西学院大学社会学部教授
1）五味百合子編『社会事業に生きた女性たち』（1973、ドメス出版）265頁。
2）『人文学報』第202号（1989年３月）。

た。この小論は林の1905（明治38）年から06年にかけての第一回目の外遊（渡米）に絞り、その実態を考察したものである。[3] これは林にとって最初の外遊でもあるが、従来こうした基礎的な研究も為されて来なかったのが現状である。時代的には丁度、日露戦時から講和後のことであり、東北大凶作の問題、日比谷焼き討ち事件等が話題に上がっていた頃である。もちろんこうしたニュースの詳細は米国で知ることになる。林は帰国後、時を経ずして大阪婦人ホームの創設（1907年）、あるいは曽根崎遊廓廃止問題（1909年）、難波新地遊廓廃止問題（1912年）等の廃娼運動、そして博愛社の充実といった課題に尽力していく。こうした戦後から大正期にかけての活動において、米国での体験が少なからずの影響があったものと思われる。詳細は今後の研究を待たねばならないが、先ずは米国での林の史実の解明とともに、かかる帰国後の取り組みを視野に入れたものでもある。

１章．林歌子、博愛社についての研究史

従来、林歌子研究はその事業との関係で博愛社との関連でなされてきたといってよい。最近に出されたものとして、創立100年を記念として上梓された『春夏秋冬恩寵の風薫る　博愛社創立百年記念誌』（1990）があり、これはＢ５判、327頁にわたる大部なものである。もちろん明治期から博愛社は施設の歴史をまとめている。ちなみに博愛社が出した主な著書には小橋実之助『博愛社』（1902）、小橋カツエ『博愛社』（1940）、『博愛社要覧　創立五十年記念』（1940）、及川英雄『主よ備え給う』（1965）等がある。これらはどちらかと言えば施設史というジャンルに入るものであるが、ここには小橋勝之助や実之助、小橋カツエら共に博愛社に関わる林歌子の事績が触れられている。

２つ目として、林歌子個人の伝記的著作の代表的なものとして、久布白落実『貴方は誰れ』（牧口五明書店、1932）がある。これは矯風会において林の最も身近にいた18歳年下の久布白落実が、本人からの聞き取りや書簡を中心に林の前半生をまとめたものであり、資料的価値としても高く、その後の林の伝記的著作に影響を与えている。[4] 他に伝記的著作として、村島帰之『美しき献身』（清文堂書店、1948）、高見沢潤子『涙とともに蒔くものは』（主婦の友社、1981）、佐々木恭子『林歌子』（大空社、1999）等がある。しかしこれら伝記的な著書は林の全体像を知るうえで、手っ取り早いものであるが、実証性に欠ける点があり、今後、資料的な研究と併行しながら、林歌子の研究をやっていく必要がある。

３つ目として、キリスト教婦人矯風会、あるいは女性史の関連であるが、石月静恵は『戦間期の女性運動』（ドメス出版、1996）の著書中「日本基督教婦人矯風会」の項で大阪支部長としての林を、廃娼運動や大阪婦人ホームを中心に扱っている。石月は他にも「廃娼運動と林歌子の生涯」右田紀久恵・井上和子編『福祉に生きたなにわの女性たち』（編集工房ノエ、1988）や「林歌子」『春夏秋冬恩寵の風薫る　博愛社創立百年記念誌』（博愛社、1990）、「『婦人保護事業』に貢献」米田佐代子他編『歴史に人権を刻んだ女たち』（かもがわ出版、1996）がある。そして他に大谷リツ子「林歌子」『社会事業に生きた女性たち』（1973、ドメス出版）等があるが、これらは簡単な林の伝記である。また神崎清は『恋愛古事記』（1948、雄鶏社）という著の中で「小橋勝之助と林歌子」という章で、二人を「プラトニック・ラブを完成した例」として描いているのは興味深い。[5]

以上から窺えるように林歌子の研究はまだ十分に行なわれているとはいえない状況である。資料的問題という点からいうと『婦人新報』の復刻もあり、博愛社の資料等と併せて考察していけば従来より対象化しやすくなったといえよう。

3）林は1922（大正11）年にも久布白落実と共に、矯風会の世界大会に参加しているし、幾度か外遊する。

4）久布白は林につき「私は林女史に迷惑をおかけしたことも何人よりも多く、恩顧をうけたことも何人よりも多く、しかも報いるところ何一つなかったことを思って、慚愧にたえなかった」（『廃娼ひとすじ』264頁）と述懐している。

5）ちなみに神崎がここで挙げているのは、「植村正久と山内李野」「北村透谷と石坂美那子」「大井憲太郎と景山英子」「半井桃水と樋口一葉」等である。

２章．渡米までの略歴

（１）博愛社赴任まで

林歌子の渡米の実態について論じていく前に、さしあたって林歌子の略歴を、（１）博愛社赴任まで（２）博愛社と林、の２期に分けて瞥見しておこう。[6)]

林歌子は1864（元治元）年12月14日、現在の福井県大野市で生まれた。父は長蔵で林家は代々土井藩に仕える徒士武士であった。母は歌子３歳の時、死亡し、長蔵は後妻をもらっている。その後も女子ばかり生まれたので、歌子は長女（総領）としての環境に置かれることになる。長蔵の夢は学問をすることであったが、それは歌子に託され、歌子はそうした学問をする環境の中で少女時代をすごすことになる。福井に女子師範が開校されると、歌子はこの寄宿舎に入る。明治天皇北陸巡行の時は御名代として女子師範の視察に来た大隈重信の前で御前講義を行なうほどの優等生であった。

1880（明治13）年、師範学校を卒業し、歌子は生まれ故郷の大野で小学校教師となっている。そして３年後の83年、歌子は従兄弟の阪元大円と結婚することになる。一男をもうけたが、阪元も長男、双方後継ぎという難題があり、二人の仲は引き裂かれる。子供は阪元家に引き取られたが、生後50日くらいで、程なく栄養失調のため死亡する。「貞女は二夫に見えず」という覚悟と、この経験が歌子のその後の人生に大きな伏線となっていった。

1885（明治18）年12月、林は東京に出て立教女学校の教師となった、そこで彼女はウイリアムズ主教（Williams, CM 1829～1910）と邂逅し、彼から大きな影響を受ける。キリスト教に出会い、神田教会に通うようになり、1887年６月26日、彼から洗礼を受ける。またこの教会を通して、小橋勝之助・実之助兄弟とも知己となるのである。

一方、林の初期研究で欠かせない小橋勝之助（1863～1893）は文久３年１月25日、播州赤穂矢野村瓜生で生まれた。家は庄屋格で裕福な農家であった。しかし、15歳の時、父が他界した。彼は神戸医学校で学び、その後東京帝大医学部で学ぶため東上し、先ず語学を学ぶため共立英和学校に入学した。翌年より東京での生活は弟実之助との共同生活となったが、肺を患い入院することになる。少年時からの不節制が大きな原因と知った。彼は高瀬真卿の事業に参画し、感化事業や心学等にも関心をしめす。そして、キリスト教にも出会い、ウイリアムズの牧する神田教会に通うようになり、1887年５月８日洗礼も受ける。そして既述したように、この教会で当時立教女学校の教師であった林歌子や名出いく子らと出会うことになるのである。

しかし母が死去し勝之助は家業に専念しなければならなくなり、故郷赤穂に帰り、そこでキリスト教の伝道活動を行う。かくて1890（明治23）年１月、小野田鉄弥、沢田寸二、前田英哲、実之助ら共に、故郷に博愛社を創設した。[7)] 勝之助は石井十次と知己となり、岡山孤児院と連携し、将来の事業として北海道に土地を求める意向を示す。1891年10月、濃尾大地震が勃発し、その救済事業、震災孤児院の事業に多忙を極め、身体も次第に衰弱していった。彼はこうして後継者のことも考えて行かねばならなくなり、そこで思い浮かんだのが、神田教会で出会いがあった林歌子であった。

（２）博愛社と林

勝之助が博愛社へ東京にいる歌子を呼ぼうとしたのは1892（明治25）年の初め頃からである。勝之助は林の許に次のような書簡を差しだす。

> 社員の与論にては貴姉が適任ならんとの事に候。然れども貴姉にも家庭の繋累有之、又当今立教女学校にて貴重なる地位に居られ候事と遙察仕候。然れども以上の事主の聖旨に協ひ、日本将来にとりて大切な事なれば、軽きことは自然主の恵みにて都合の出来る事も有之候。又貴姉が博愛社に対する事は、創業者の一人の如く尽力されたり、之に由ても主の聖旨のある所を御考へ被下度候。何卒此事軽

6）ここでは主に、久布白の著『貴方は誰れ』を主に参考した。

7）『博愛雑誌』第１号（1890年５月５日）によれば、創設当時、小橋が博愛社の事業として考えていたのは、「博愛社文庫」「慈善的普通学校」「貧民学校」「貧民施療所」「博愛雑誌」「感化院」「孤児院」の７つであった。

きことに御考へなさらず、主に御熱祷被下、篤と御勘考の上御意見御申越被下度候……播磨の学校にて御働き被下候事は、岡山と名古屋に大なる感化を及ぼし、三ケ所に御働き被下と同様に候。其の責任の大にして十字架の重き事は、豫て御承知被下度候……[8)]

歌子も相当苦悩したあげく決断をくだす。1892年８月27日、林は父を説得し、故郷大野の家を出、播州赤穂瓜生に向け出立した。この間、勝之助は病気を押し、北海孤児院を訪れていた。そして衰弱し帰郷した勝之助は歌子と再会する。翌93年に入ると勝之助の病状は重くなり、２月26日には弟実之助と歌子の間に死後の計画相談がなされた。そして３月12日、阿波松之助が来訪し、勝之助は遺言を伝え、若干30歳の若さで昇天した。

1894年３月12日、勝之助の遺言どおり、また赤穂での博愛社継続に対する親戚の反対もあり、勝之助の命日に博愛社を赤穂から大阪の大仁村へ移す。場所は阿波松之助の門長屋であった。以後林と実之助との共同作業が続いて行くわけだが、児童も増え、新しい土地の選定に入っていった。かくて東京在のウイリアムズにも世話になり、寄付も集まり、大阪十三の神津村に引っ越していくことになる。1899（明治32）年２月１日、博愛社新館も完成し、移転が現実化した。同時に社団法人となり、また翌年には普通学校も許可された。

1899年６月24日、機関誌『博愛社月報』が発兌された。林は愛隣夜学校（林可彦の創設したもの）の経営にも協力し、社内の児童も80人近くに増えていき、校舎も増築され設備も整えられていった。中心は二代目社長実之助と林であったが、実之助の妻帯の問題が上り、プール女学校で裁縫を教えていた山本カツエに白羽の矢が立つ。そして1904（明治37）年３月12日、大阪移転10周年記念会を経、４月７日、実之助と山本カツエとの結婚式が川口教会において名出牧師によって執り行われた。これにより、歌子は社母として実之助夫妻を助けることになった。ちなみに彼女が結婚のため持参したのは洋服箪笥、オルガン、長持の中は子供達の着物と袴76人分、別に蒲団76人分、蚊帳11であった。こうして1905年、よき後継者を得て、歌子は訪米する決心をするのである。

ところで林が明治30年代より積極的に参加する婦人矯風会は、1886年12月６日、矢島かぢ（楫子）を会頭にして創設された東京婦人矯風会に遡る。その時の規約第二条には「本会は社会の弊風を矯め道徳を修め飲酒禁煙を禁し以て婦人の品位を開進するを目的とす」と規定されている。翌年、主意書も出され、また88年からは『東京婦人矯風会雑誌』（後に『婦人新報』—95年）が刊行され、1903年に日本婦人矯風会（後に日本基督教婦人矯風会）として全国的な組織団体となった。禁酒禁煙、廃娼、足尾鉱毒問題等の闘いを展開した。林の矯風会には東京時代より参加していたようである。

1899（明治32）年６月、大阪婦人矯風会が創設された。次の年にその会長についているように林は大阪での活動に積極的に関わっていくことになる。当時の様子は「大阪婦人矯風会は今回新たに設立せられ去月廿一日川口バルナバ病院内に於て発会式を挙行され、矢島会頭も出席せられ頗る盛会なりしとぞ、同会会頭には宮川次子、書記には名出いく子及林うた子会計には樫内晰子等それぞれ選定せられたり」[9)] とある。また1900（明治33）年には「本会は去る六月廿三日矯風会大会の為め特別祈祷会を開き役員改選を行ひたり新役員の姓名は左の如し　会長林うた子、会計丹羽りき子、大島あい子、書記清水やす子、川島よし子」[10)] と報じられており、この時より林は大阪婦人矯風会の会長に就くのである。そして1905（明治38）年の訪米を迎えることになる。

ちなみに林は渡米に就く1905年までに、『婦人新報』に発表した論文は第89号（1904年９月25日）の「傷病兵慰問報告」という小論のみである。一方、博愛社の機関誌『博愛社月報』には「北陸紀行」（52号）「住友家の家庭」（第60号）といった小論を書いているが、概して明治30年代は論文をさほど書いているわけではない。

8)『春夏秋冬恩寵の風薫る　博愛社創立百年記念誌』（博愛社、1990）62頁。
9)『婦人新報』第29号（1899年９月25日）。
10)『婦人新報』第41号（1900年９月25日）。

３章．林歌子の渡米（1905年～06年）

（１）林の渡米についての叙述

従来、林歌子の1905（明治38）年６月から約１年半の渡米についてどのように叙述されてきたのだろうか。まずこの点からみていこう。久布白落実の書いた彼女の代表的伝記と称せる『貴方は誰れ』においては第二編で「38、歌子の渡米　39、米国の歌子女史　40、沿岸にて　41、紐育　42、二人の姉妹　43、壱萬弐千円」という項目において叙述されている。[11] 渡米につき「英語を学ぶと云ふ事は、歌子の長い宿望だつた」「少しく自由の天地に逍遙して、自ら養ひ又外界から博愛社の基礎を更に堅むることに尽せばよい、彼女は十三年振に、鮮やか気持ちで渡米の途についたのだつた」と。そして林の米国での様子を上の項目に即して簡単に紹介している。

『日本キリスト教婦人矯風会百年史』において、林の渡米は「矢島楫子の世界大会出席」という箇所で「在米中の大阪の林歌子も出席している」と簡単に触れられているに過ぎない。[12] 矯風会からみれば林の渡米はさしたる大事件ではなく、むしろ会頭矢島の高齢での初出席の方が、重要な事件であったのだろう。

石月静恵は『戦間期の女性運動』において「実之助夫妻が協力して博愛社を運営しているのをみた歌子は、一九〇五年アメリカに旅立った、アメリカで博愛社への募金活動をおこない、また各地の事業を視察した。翌年一二月、博愛社への募金一万五〇〇〇円を携えて林歌子は帰国した。……略……一九〇五年に渡米したとき、歌子が頼っていったのが大久保家であった。そこで、娘の落実（後の久布白落実）と親しくなった。一九〇六年ボストンで開催された第七回万国矯風大会に、落実は『学校を休み、家のことは捨てて』矯風会会頭であり大叔母にあたる矢島楫子に同行して、通訳をつとめた。この大会に歌子も参加し、『矢島、林、大久保（私）三代の代表が現れたことになった』という。時に矢島楫子七六歳、林歌子四二歳、久布白落実二四歳であった」[13] と論じている

次に林自身の回顧である『入信五十年』においては「アメリカにて」という箇所でつぎのように述懐されている。[14]

> 博愛社の世帯譲りをすませると、私は又しても大希望を抱いて太平洋を渡りました。宣教師テイング師夫妻と同道してバンクーバーに着き、そこで夫妻と訣れて単身、太平洋沿岸の各地を訪問、バークレの大久保牧師の家庭を訪ねました。令嬢落実さん（現久布白落実女史）が玄関へあらはれて取次をされた当時の模様は、簡単ながら「貴方は誰れ」に見られます。
>
> 紐育で日本音楽会といふ破天荒の催しをやつて、八百円の純益を得ましたのが、博愛社に紐育館となつて記念されました。
>
> 婦人補助会の書記ミス・エムリーの好意で半ケ年のプログラムを定めて貰ひ、各地の事業施療を視察いたしました。その後ミス・カーターに連れられてメーン州の夏期遊園地へ行て夏休みをしてゐる間に、ミセス・カクランの二人の娘さん、ミセス・イユーイングとミセス・スチアートから三千弗宛、都合六千弗の寄付金を受けるに至り、これで教会堂が建設される運びとなりまして、必要な拡張土地を買ふ資金も、教会も与へられ、「まことにエホバは活き給ふ」と讃美感謝の念にあふれた次第であります。
>
> 更にその年ボストンに開かれた矯風会万国大会に出席しました。矢島楫子会頭は七十四歳の齢をもつて遙々出席されました。当時二十三歳の大久保落実子が通訳となつて随ひ、七十の会頭に四十の私、二十の大久保で、日本代表は親子孫の三代が出てゐるようだともてはやされたものでありました。

この回顧文や『貴方は誰れ』の叙述がその後の伝記小説に反映されているように思われる。しか

11）久布白落実『貴方は誰れ』（牧口五明書店，1932）277～287頁。
12）『日本キリスト教婦人矯風会百年史』（ドメス出版，1986）233頁。
13）石月静恵『戦間期の女性運動』（東方出版、1996）199頁。
14）林歌子『入信五十年』67～68頁。

しまだ詳細な林の米国生活の解明がなされているわけではない。彼女が１年半の初の異文化体験において何を考え、何を主張しようとしたのか、先ずは資料に基づいて考察していく必要がある。ここでは主に機関誌『博愛社月報』を使用する。

（２）渡米の経緯

既述したように林歌子の渡米をめぐって、林の回顧や『貴方は誰れ』の簡単な記述以外、従来その史実を明確にしていない。彼女の米国での生活について、まず如何なる事実が存在したかについて、資料に当たっていく必要があろう。基督教婦人矯風会の機関誌『婦人新報』には、第101号（1905年９月15日）に「米国便り」（会頭あて）と大阪矯風会報告記事中の２通の書簡があるにすぎず、それも米国着後と西海岸の歴訪に偏っている。そしてその内容は到着時からの活動報告が中心である。[15] 投稿された量からいうと博愛社の機関誌『博愛社月報』が圧倒的に多く、以下に記す如く詳しく掲載されている。従来この博愛社の資料が使われたこともなかったが、この資料により米国での林の行動がかなり詳しく知ることができるのである。

さて渡米に関することが最初に月報に報告されるのは第62号（1905年６月12日）の「社員林歌子の渡米」という記事である。冒頭に「本社員の一人でありまする林歌子と申すのは、この度慈善事業のありさまや、婦人界の運動の現象を視察致します目的で略一年間ほどの予定で米国に参ることになりまして」云々とあり、丁度米国へ帰国するティング牧師やその家族と共に５月29日、大阪を出、神戸横浜を経由して出立したと報じている。そして何ゆえにこの企てがあったかを論じている。

先ずその「由来」から説明されている。博愛社の事業も多くの協力で順調に発展してきたが、現状に満足すべきではなく、他の機関と並んで、有機的社会の最も大切な機関となるまで進めていく必要があること、すなわち「この場合に当りまして他の事業の進歩に遅れを取らないだけに斯業を発達させ、且つ一面にはその紛糾を加へて参る間に社会の裏面に必然伴生併発することの免れ難い人生の悲惨な出来事＝私共の尽さねばならぬことを遺憾なく滞りなく果して参るには予めそれに備ふるだけの用意がなくては叶はぬ次第であると信じます」と。そして博愛社の充実には「財政の安固」「家屋の設備の充実」「適当の人物の配置」の３つがさし当たっての必要性から生じているとしている。

次にその「目的」として慈善事業の最前線、米国での知識を得てくること、博愛社の財政的基盤の充実との二つを挙げている。そして「本人の林歌子が別に関係致して居りまする婦人矯風会の立場から観光察俗のことを一つの目的に加はつたことであります」とあるように矯風会の仕事も追加された。このことが決定したのが５月16日のことである。つまり「チング牧師が本国の亜米利加に帰らるゝに際しまして、遽かに相談が纏まつて同氏の一行と同道」していくことになったのである。そして29日出発と慌ただしい準備期間しかなかった。ところで米国聖公会の機関誌『基督教週報』11－11（1905年５月12日）には「チ、エス、チング氏は来７月頃帰米せられるべし」という記事があり、この段階では７月とあり、何かの理由で早まり林の渡米もこれに併せて急遽決定したと推察される。[16]

かくて林は送別会の席上次のような挨拶を送っ

15）最初の書簡には当地の教会の状況、美以教会鏑木五郎牧師やシアトルでの林の演説会、そしてさらにポートランドでの様子、吉岡誠明牧師を中心にした教会の活動、あるいは７月25日に婦人矯風会の支部が出来たこと、「小妹は社用のために重に桑港に滞在致し、傍ら矯風会のために色々話しなど致したき考に御座候」と矢島会頭宛てのため矯風会関係が中心に報じられている。「また来年は世界の大会を開かるゝ年に当り候由にて其場所を承り度待居候、来秋帰朝の予定に候が、其大会の都合によりては参列したき希望に御座候」とあり、この頃より世界大会の参加を希望している。
二つ目は『大阪矯風会々報』からの報告であり、大阪矯風会宛てのものと思われる。内容は一つ目の書簡と重複しているところもあるが、シアトルにおいて「二三日滞在の積りにて参り候処スマート嬢の添書を当市在留のワシントン州の書記マーン夫人に持参致し候へばマーン夫人は新聞に広告し肖像を出し色々準備せられ候」云々、そして７月13日に支部が誕生したこと等が報じられている。

16）ちなみに『基督教週報』11－14（1905年５月26日）には「チング氏は日本語聖書翻訳のため愈五月廿九日家族と共に帰米せられたり」とある。

たという。「愛する百人の家族と分れ又我を愛せらるゝ人々の多きこの大阪と分るゝは不肖に取つて忍び得ざる所なるも凡ての事一に皆神の旨と信ずる所に従ふて進退するの外なく而して彼地に行かば又多くの朋友に接し且新なる智識を与へらるゝべければこれを希望とし慰藉として彼地に向はんとす云々」と。

また『博愛社月報』収載の「告別の御挨拶」では次のような文面がある。

小妹この度慈善事業并に婦人会運動の有様など視察のため約一ヶ年間の予定を以て渡米致し候、就ては出立前一々御挨拶可申上筈のところ速かに決定し候ことゝて混雑に紛れ其義を欠き候段不悪御諒恕奉仰候度、尚不在中は本社に対し不相変何角と御同情御心添を給りたく御願申上候先は乍略儀紙上御挨拶を兼ね右申陳度候

明治三十八年六月　　林　歌子

辱知諸兄姉様御中

そして「林歌子君を送る」という文章が掲載されている。冒頭には「林歌子君慈善事業界の状況并に婦人界運動の現象を視察せんとして本日渡米の途に上れり」とあり、「然り博愛社の事業は達したりと雖も、詳かに之を察すれば素より未だ完備を尽せりといふを得ず、茲に現下社会の趨勢に鑑み能くこれに適応せるものとせんには其組織に於て將た其財政に於て更に一層の充実拡張を要するものあるや明かにして、これ蓋し平生当局の両君等が絶へず心を苦しめられつゝある所以なるべし。…以下略…」と述べられている。

ここで林と同行（帰国）するティング牧師夫妻についてみておこう。[17] ティング（Tyng, T, S）（1849～1927）はオハイオ州コロンバス生まれ、ケニヨン大学、コロンビア大学を卒業し、ケンブリッジ神学校に学び、伝道活動に尽力していた。78年11月、日本に夫妻で来日し、大阪川口基督教会や和歌山地方、京都聖ヨハネ教会等で伝道し、東京においても立教や東京三一神学校等で教鞭をとった。在日本中には多くの日本人に影響を与えている。また聖公会と関係の深い博愛社とも親しい関係があった人物である。夫妻の帰国に林は便乗させてもらった感もする。この時は３年間の一時帰国で、1909年、健康を害して帰国し、アッシュランドの聖マルコ教会で牧会に当った。

このように、林は慌しく５月29日大阪を出、31日神戸を出発した。[18] ６月２日東京にて矢島楫子会頭、小宮珠子（立教女学校）、翌３日マキム監督とスマート嬢にあい、当日午後４時、アテニアン号にて横浜を解纜し、バンクーバーまでの長い船旅に就いたのである。もちろん四十路を越えた林にとって始めての外国の旅、異文化体験であった。

（３）米国の林歌子

（ｉ）「米国だより」について

着米後、林は『博愛社月報』に近況を「米国だより」として逐一報告している。それをまとめると以下のようになる（タイトル等は原文のまま）。

第１報「米国だより」【63号】（1905年７月18日）

第２報「社員林歌子氏の来信」（７月２日晩香坡発）【64号】（1905年９月５日）

第３報　同　（８月４日桑港発）【64号】（同）

第４報「林歌子来信」（９月13日ローサンゼルス発）【65号】（1905年10月５日）

第５報「米国だより」（ローサンゼルスに於て）【66号】（1905年11月15日）

第６報「林歌子来信」（11月19日ケンブリッヂ

17）ティングについては大江満『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯』（刀水書房、2000）、伊沢平八郎「ティング」『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988）等を参照した。また『博愛社月報』第62号（1905年６月12日）の小橋実之助「チング教師と其家族を送る」という文には「氏は在留二十七年の間一度東京に移り、後居を大阪に卜されて以来其同国の人々に本社を紹介し、或は本社日曜宗教の礼拝を司られ、特に本社が幾度か企てたる音楽会に当り毎回殆んど力を籍らざることなく、先年本社水害の事あるや氏は真先に本社の急を見舞ひ其惨状を目撃せらるゝや深く心を動かし直ちに檄を阪神外国人間に飛ばして数百円の義金を募り本社の急を救はれ、又其斡旋により罹災後衛生避難のため尽されたること」云々と記されている。博愛社の恩人の一人でもあった。

18）『博愛社月報』第62号には31日「前日神戸に出でたる林歌子女史本日出帆の汽船にて彼地に向ふにつき小橋社長は二三の役員を伴ひ神戸に見送れり」とある。

発）【67号】（1905年12月15日）
第７報「林歌子来信」（12月15日ケンブリッヂ発）【68号】（1906年１月12日）
第８報「米国便り」（１月18日発　紐育に於て）【69号】（1906年２月12日）
第９報「ニューヨークに近きショートヒルズにおいて」（２月26日発）【70号】（1906年４月10日）
第10報「米国便り」（ヒラデルヒヤに於て３月28日）【71号】（1906年５月20日）
第11報「米国ヒラデルヒヤに於て４月23日夜」【71号】（同）
第12報「米国だより」（５月28日バルテモア発）【72号】（1906年７月８日）
第13報「米国だより」（ニューヨークに程近いヤンカースにて６月25日）【73号】（1906年８月20日）
第14報「メーン州ソレントにて」【74号】（1906年９月５日）
第15報「祈りに対する神の賜物」（メーン州ソレントにて）【74号】（同）
第16報「メーンソレントに於て」（８月25日）【75号】（1906年11月５日）
第17報「ステンスン湖畔にて」（９月25日）【75号】（同）
第18報「米国土産（家信の続き）」【77号】（1907年１月５日）
第19報「米国土産（家信の続き）」【78号】（1907年２月５日）

第18、19報の発信は米国であるが、林の帰国後掲載されたものである。ちなみに第76号（明治39年12月５日）には「社母林歌子姉の帰朝を迎ふ」という巻頭論文が掲載されている。そして同号には林の「帰朝御挨拶」も掲載されている。以上が林の報告であるが、ここで19回にわたる書信による主だった報告をみていくことにする。この林の米国訪問の旅は大きく分けて、11月までの西海岸中心の時期とそれ以降の東部中心の時期とに二分される。先ず横浜解纜、バンクーバー到着から西海岸の都市を訪問していったことからみてみよう。

（ii）西海岸訪問

第１報の「米国だより」では上記の５月29日大阪出立から６月３日の横浜解纜、６月17日バンクーバー着までの行程が詳細に報じられている。特に船中において、ティング牧師より食堂の礼儀や会話の稽古等「有益なる学びの時」をもった。しかし「忘れんとして尚離れざるは愛する家族社児の面影に候」「夜は目を醒すこと多く夢を結ぶ度毎にいつも浪華へ飛びて色々と楽しき物語を致す」と眼底瞬時博愛社の児童を思っていることが綴られている。バンクーバーでは楠本六一が船中まで迎えに来ており、土屋、黒田四郎らの世話になっている。

第２報ではバンクーバーで２週間過ぎ、一両日中に楠本と米国に向け出発の予定、９月中はシアトル、タコマ、サンフランシスコ等を廻る予定とのことが書かれている。

第３報ではポートランド滞在17日間、ポートランドは博覧会開催中であった。そしてシアトルから100弗送付したこと、同胞への演説とシアトルに続き、婦人矯風会支部の誕生等が報告されている。

第４報ではサンフランシスコに８月３日に着し９月７日まで滞在したこと、また悲しい報告としてティング夫妻が帰宅後腸チフスに罹り、そのため東部行が遅れることが報じられている。[19] そして女子の孤児院を訪問し「建築其他万端に於て実に完備して入浴場、洗面場など常に苦心致候処尤もよく整ひて羨しく感じ候無邪気なる子供を見て社児の事を思出してそゞろ涙を催し申候」と感想を認めている。その後７日フレスノに行き、９日ロサンゼルスに着している。また日本のことも気になっているようで、日露戦争の講話条約、日比谷の事件等についても当地の新聞で知り、「内国にある時よりも時に国の事と見ゆるものに候へば真に涙を以て国のため祈り申候」と心情を寄せている。しかし既述したようにオークランドにおいて大久保真次郎や娘の落実との出会いがあったわけだが、このことについての報告はない。[20] もちろんこの時期、落実が林と同働者となることは

19）『基督教週報』12－１（1905年９月１日）にはティング夫妻につき「目下腸窒扶斯に罹り居らるゝ由併し格別懸念すべき容体ならずと云ふ」とあり、また同紙12－14（1905年12月１日）では「病気快癒目下マサチューセッツ州にケンブリツヂ府に住居」と報じられている。

思ってもないことであった。

第５報ではティング牧師夫妻の病状にふれ、そのため西部滞在の延期、丁度、10月下旬に合衆国連合の婦人矯風会大会が当地にて開催される予定のため、これをよい機会とし11月３日（天長節）まで滞在する予定としている。また海外に於ける天長節の祝いに興味を示している。殆ど毎日予約の集会で多忙を極めていること、小崎弘道牧師夫妻がロサンゼルスに滞在したこと等が報告である。

第６報では11月15日のティング牧師夫妻への訪問、ティング夫妻の病状のことが記されている。また10月27日からの一週間開催された婦人矯風会の件については「会員五百人に対する一人宛の代表者は各州より来られ立派なる集会一日三四宛の集に可成出席し学びまた短き話を致し候」。その後パサデナという禁酒の町等を訪問し８日にシカゴに着し、13日までシカゴに滞在している。エバンストンへの訪問、ナイアガラの滝を見物し、ティング牧師宅に宿している。こうして林は西から東にと大陸を横断し、翌年11月再び西のシアトルに帰り帰国するまで東海岸の諸都市を歴訪する。

ところでこの時期、「ポートランド出立に近づき誌上にて小崎牧師夫人同伴沿岸を巡教せらるゝ由承り実に喜び申候」[21] とあるように小崎弘道夫妻が渡米し、林と同様に西海岸の都市を歴訪している。夫妻は９月初旬にバンクーバーに着し、シアトルや、オークランド、サンフランシスコ、ロサンゼルス等、時には林と同道している。小崎千代子はこれを『婦人新報』に逐一報告している。例えば10月８日、ロサンゼルスでの報告には「同日午后メソジスト教会にて同地の姉妹の為婦人矯風会支部設立の為矯風会の成立現状を語る同二時より集会を開きました、会する者は同地外国婦人矯風会の方々十人以上御集りに相成、日本の姉妹十人斗り集り林姉と私と勧話しました」[22] 云々とある如く、二人で講演や勧話をし矯風会事業に挺身している。

（iii）東海岸の歴訪

第７報ではケンブリッジ滞在約一ヶ月になったこと、「当地にては重もにチング氏の家族に加へられて相暮しグリーン教師の御家族も教育のため当地に居られ候へば迎へられて暫し客となりあちこち親戚の方々の処へも招かれ申候」。またハーバード大学のこと、エール大学との「玉投げの遊戯」（アメリカンフットボールか）の試合のこと等が詳しく報じられている。そして「ボストンの婦人伝道師七八名共に住みて色々の慈善の仕事やら日曜学校の働きにやられ従事せらるゝ家へ招かれて一週間滞在いたし同市の孤児院病院婦人収容所など参観致申候」と報告している。

第８報では21日、ケンブリッヂなるティング宅を辞し、ハートホードルに着しページ教師と秋山楽子に会い、ページの客となり、異国でのクリスマスの模様が報じられている。そして26日、ニューヨークに向かい、「茲二ヶ月間は紐育に滞在致すべき心積りに有之見聞視察のためには種々の慈善事業に従事し給へる方々の宿らるゝセント、バルナバ、ハウスという申す処こそよからんとのエムリー嬢が御配慮にて初じめ一週間の予定を以て其処に滞留致し候処好き客人を得たり尚暫し滞留せよとの御勧めに従ひ止り居り候」と報じている。１月２日にはニューヘブンで講演し、翌日、清田良之助の案内にてエール大学を見学している。

第９報においては日本での博愛社の様子を知り、喜びを認めながら次のような報告がある。

20）『貴方は誰れ』において、「九月末の或日だつた、門際で『御免下さい』と云ふ女の声がする、誰かと自分は出て見れば腰までかゞめて辞儀をする洋装の婦人が見えて居る、見慣れぬ人と尋ぬる前に『私は大阪の林です、大久保さんはこちらですか』……略……それを切かけに林さんは、自分等の家に二週間程泊られた、そして其間に王府の界隈にかけ種々の集会を開かれた、王府の集会だつたと思ふ博愛社について幻灯を持つて語られたやうだつた」（279～280頁）と記されている。

21）林歌子「米国便り」『婦人新報』第101号（1905年９月25日）。

22）小崎千代子「米国巡回日記」『婦人新報』第105号（1906年１月15日）。また同誌第107号（1906年３月25日）の報告では「翌日労を休めんとて林歌子姉など、共に八哩ばかりのロングビーチと称する海岸に遊びに行きました、この海岸は遊覧地でありまして、鎌倉辺の如く貝細工とか飲食店とかもありますが、海中に大なる奏楽堂があつて誰でも聴けるのみならず、奏楽につれて誰でも勝手に舞踏される様になつて居ります」と報じている。

児童の増加につきては是非一棟の病室なくてはと小妹も種々苦心いたし爰に当地在留の同胞婦人方の発起にて幻灯音楽会を催し候結果与へられたる金四百弗御送り申上候、予算の額には達せず候へ共可然御設計の上此金だけにて小くとも一棟建築なし被下度出来上り候上はニユヨーク館と命名なされ度候

林の要求どおり、博愛社は新館の建築に着手し、紐育館と命名された。[23)]

第10報において、19日にニューヨークを発ちフィラデルフィアに着したことが記されている。そして、

ニユヨーク滞在中には種々慈善事業の視察を致すべく、孤児院へも参りまた貧民の訪問にも病人の見舞にもデコネスの婦人に伴はれて参り申候、デコネスの婦人は、華美なる米国婦人の中にありて、全く其身命を捧げて伝道慈善の働きに尽さるゝものから訪問を受けし人々の喜びは実に非常にて、手に接吻して感謝の意を表し申候、手に接吻するは伊太利の風俗、ニユヨークは伊太利人、猶太人の入込み甚だ多く各一所に群居致居申候、其辺は貧民の最も多き所にて、各種の慈善機関は其処に居を占めてさまざまの事業を営み居申候、ミス、プールの姪に当らるゝミス、パーフイトの所を訪ひ参らせ候ひしが、大なる慈善事業の営なまるゝ所にて、午前は幼稚園、午後は簡易なる教育の傍ら料理、裁縫、体操等を教へ、此外各所にある昼間子供を預かる保育園も実によき働きを致居申候、朝幼稚園は其母姉また父に伴はれて参り、夕にまた働きより戻りし親に迎へられてかへり、日曜日だけは家族打揃ふて楽しく暮すに候、立派に教育を受けたる人々または資産を有する人々が余念なくかゝる事業に身命を捧げて働かるゝは国家元気の源と存候、

第11報にも当地の慈善事業施設、とりわけ広大な養護施設のことが驚きの息づかいでもって報告されている。

◎慈善事業としては驚くばかりの広大なるものを参観致申候、その一は今より百二十年程以前仏国より来りし有意の青年ジユラードと申す人始めは無一物の貧しき身なりしが、刻苦勉励商業に従ひ、終生娶らず、八十一才の高齢を以て眠に就きし時他の多くの公共事業にも寄付したる上に、特に其身が幼児父を失ひ充分の教育を受け得ざりし記念に同じ境遇の貧しき孤児のため実業的孤児院を設立せよとて遺産七百弗を以て六十余年前に建築したるが即ちジユラードカレージに候、

◎このカレージは広壮なる敷地に十四五棟の建物あり、朝夕全家族が集る礼拝堂別して図書館には創立者ジユラードの墓并に故人の遺物尽く保存しあり中にもジユラードは此寝台の上にありて静に神の召をうけしなりと

◎此院の収容者は年齢六才以上十八才にて、卒業の時までには中学の科程を修め同時に実業を以て身を立つるだけの教育を与へられるゝ由に候、其実業の種類は機械製造、電気、電車、電話等にて鍛冶、大工、製図、測量、皆それぞれ担任の教師あり、児童はかわるがわる来り学び其製作品は各自皆之を保存して卒業退院の時には貰ひ受けて携へ行くなり、製作品の多くは専ら実地的のものにして之に投ずる費用は養育費よりも多し、而も其維持は基本金利子にて余りありとの事に候、現に一千五百名の男子を養育致居候、

第12報は４月28日にフィラデルフィアを出て、ワシントンに着したこと、「合衆国政府を置かんために開きたるいと新しき理想の市なれば其美しき事実にこれまで参りし市街の中にも最も著しく」と、その公園の美しさ、ホワイトハウス、ワシントン記念塔等、首都の様子が詳しく報じられている。リッチモンドやバルチモア訪問の記、そして更に他の都市を訪問する予定が認められている。

23)『博愛社月報』第75号（1906年11月５日）には「病舎の落成」と題して写真を掲載し次の様な報告がある。「豫て在米林歌子氏より紐育慈善会寄付金八百余円を病室建築費として贈られ起工中なりしが此程悉皆落成を告げたり、平屋建の西洋館にて総坪数二十八坪中央に廊下を通じ六畳三間を病室とし他は看護婦室薬局診察室等に充て病舎としては頗る都合よく出来たり、目下病人少なければ一室を病室に充て他は暫く塾舎の増築を見る迄幼年部の一部を引き移しぬ」。

第13報の文頭には「今頃は春刈り田植の忙しき頃殊に東北より一時に沢山なる子供の来りし事を聞き広からぬ家は溢るゝならん日常の費用は頓に嵩み候は申に不及万端に於いて嘸や皆様の御骨折をおしはかりまた遙々と知らぬ処へ来りし子供達の心はいかになどゝ察して一入心に懸り切なる祈祷は不絶往復致申候」と、恐らく東北凶作の児童救済の件が知らされたと推察される文言が窺える。周知のように1905（明治38）年、翌年の東北大凶作において、石井十次の岡山孤児院を代表として多くの施設、慈善家、宗教者らが救済活動を展開した。博愛社も東北の孤貧児を施設に受け入れる等、救済活動をしている。その報が林の所へも伝わっていたのだろう。[24] また一週間のアトランテク滞在からニューヨークへ、ここで婦人青年会について調べている。

第14、15報のソレントからの報告は特に後者には「祈りに対する神の賜物」とタイトルが付けられている如く、特別な報告である。すなわち「小妹は今茲に最も喜ぶべき通信をなすの機会を得た」と記されているように、渡米後最大の嬉しい報告であった。それはミス、カーターの最も親しい友人ミセス、ユーウングとその妹ステワートより会堂新築にと三千弗宛、計六千弗、日本円にして一万二千円の寄付を贈られたことである。

> 予て申上居候如く当国に於て寄付金を得んことは決して予想の如きものにはあらず頗る困難にて視学旅行は希望の如く順次相果し候へ共一面の目的とせる寄付金は今日まで甚だ少額にて米国友人の同情を得ると否とは本社将来の発達に至大の関係を有する事なれば何処までも信仰によりて受くより外なしと只主にさけびて止まず終夜眠られずうとうととして明かせし事も度々に候ひしが万事神の活ける導きを以て今や思に超したる恵みを受け我家族一同は申すに及ばず多くの友人の祈りの助けと感謝致申候金員は直ちにパトリツヂ監督を経て送付致申候帰朝の期も最早程なく十月十七日より二十三日迄婦人矯風会を終らば直ちに帰国の途に上る心積に御座候それまではよく祈り考へて一層事業の基礎を固くし神の栄光を顕すべき御準備をなされ度祈り上げ候

ちなみにこの報に接し、『博愛社月報』は、両姉妹からの寄付に対し「社内一同の歓喜極りなし。あゝ神の愛は讃むべき哉、此両婦人の好意に対し満腔の感謝禁ずる能はざるなり」[25] とその美挙を報じている。

第16、17報はそれぞれ「メーンソレントに於て（８月25日）」「ステンスン湖畔にて（９月25日）」とある。前者の報告において、「当地はいと小さき避暑地に候へども慈善市は三四回開かれ申候、一度は孤児院のため二度は教会のためにて、先便申上候博愛社に深き同情を表して三千弗宛を寄付せられし二人の令嬢の母なるミセスカクラン氏は当地孤児院のため独力慈善市の催しを致され候、一家一族挙つて伝道慈善に尽さるゝ有様只感服の外無く候」とカクラン氏の事を報じている。後者の報告には８月31日にステンスン湖畔に病気から全く快復したティング牧師夫妻を訪ねており、ティングの家族やそこでの生活の報告が主である。

そして第18、19報には「米国土産」（家信の続き）という題で二回あり、特に前者のものはボストンで開催された第７回万国婦人矯風会の様子が報じられている貴重なものである。それによれば大会は10月17日、パークストリート教会にて持たれた。18日よりトレメントテンプルに場所を移した。この会に出席するために、矯風会会頭の矢島楫子が高齢を押して参加している。ちなみに『婦人新報』第111号（1906年７月25日）の巻頭論文は「矢島会頭の渡米」であり、矢島は７月28日、横浜を出立した。これまで日本からの出席が出来なかったが矢島は自ら、自費で出席することになった。矢島も小崎同様、ハワイやオークランド

24）東北凶作地の児童救済について、『博愛社月報』では第71号（1906年５月20日）に小橋実之助による巻頭論文「東北凶作地児童の収容」が掲載され、同号の「特別社告」において次のように報告されている。「本社にては別項所載の如く今回頓かに東北凶作地の各貧児四十三名を引き受け収容すること、相成候に就ては今後諸般の上に一層の膨張を来たし候訳なれば社友諸君何卒一層の御同情を寄せられ本社の後援となり給はんことを願上候也」。

25）『博愛社月報』第74号（1906年９月５日）。

等から『婦人新報』に報告を行っている。矢島の訪米の目的の一つは「日露戦争調停役のルーズベルト大統領へ日本女性として感謝の言葉をのべたいことにあった」[26]。また矢島は同誌に「万国婦人矯風会大会」という報告文を掲載している。[27]

さて林の大会報告に移ろう。大会の様子を「代員は一千人に対して一人宛の代員課長等合計三百六十六名、一週間の大会中は客の待遇をうけ各指定の宿に滞在して毎日午前午後夜の三回宛の集に列せり、幹部役員方々の体力の強き其三回の集りの他に委員会等世界の大会を司導して少しも疲労の色を見ざりしことは大会中に於て尤も感じたる事の一なりき」と報じている。そして矢島楫子については

> 東洋新進国の矯風会頭矢島楫子女史が老体を起して万里の波涛を蹴り此大会に出席せられしは会衆一同に多大の満足と喜びを与へ、歓待至れり尽せりといふべく或時などは白き長きリボンにて結びし三個の槌を持ち出でゝ一個を英国婦人に一個を矢島会頭に而してミスゴルバンは剪刀にて之れを切り分ち日本の国旗を送られぬ個人としては東洋の老婦人よく来ませりと握手を求め、或いは記名を求むる人々など引きもきらず、矢島会頭はオークランドより親戚の大久保落実嬢を伴はれければ少しの不自由もなく終りに各国手を握りて別の歌をうたひ斯くて万国大会の終りを告げたるは実に其の廿三日の午前なりき……後略……

大会は23日まで続き、同月29日、ボストンを出立し、帰朝の途につき、大陸を横断し（帰路は北側）、11月３日、シアトルに着した。ここで婦人矯風会の組織化を助け10日ほど過ごし、13日に丹後丸に乗船し、米国をあとにした。船は日本に向け出港し、太平洋の荒波をこえ、予定より早く、29日横浜に着し、その後東京に向かう。[28] 立教女学校に宿し３日間滞在し、12月４日に船にて神戸に着したのである。

こうして林は12月５日、無事大阪に到着した。「帰朝歓迎」という当日の報には「林社母本日午後三時二十分梅田駅着宮川、長田、名出の諸牧師を始め各教会員婦人矯風会員其他有志者の盛なる歓迎を浴び本社出迎の社員に伴はれ矯風会旗を先頭とし神津の本社に入りしは午後四時社内少年バンドの勇敢なる歓迎の奏楽につれ一同此日のために準備を凝されたる食卓に就きたり」[29] 云々、と記されている。かくして約１年半に亙る米国訪問の旅は終焉したのである。

おわりに

以上、林歌子の1905（明治38）年５月末から、06年11月末に至る米国訪問を博愛社の機関誌を中心にみてきた。林の渡米は博愛社を中心とする慈善事業の見聞、資金調達、そして婦人矯風会の仕事の使命を帯びたものであった。

具体的には博愛社において、米国で調達した約１万5000円の資金でもって事業の拡大がみられた。林は「米国土産」の末尾を「万事の整頓せる外国の事を見て一入に不足を覚ゆる事共に向つて今後は愈々力を用ひて出来得る限り総ての設備を整へ幸福なる家庭を作り上げたいものと深く深く祈って居ります」[30] と結んでいる。さらに『博愛社月報』第76号（1906年12月５日）の巻頭論文は「社母林歌子姉の帰朝を迎ふ」というタイトルであり、林の米国での活躍を讃え、「嗚呼姉の身恙なく其望み亦空しからず益々栄光の我が社に下らんとするを想望して吾等は更に社友諸兄姉が不

26）『日本キリスト教婦人矯風会百年史』（ドメス出版、1986）234頁。

27）『婦人新報』第115号（1906年１月25日）。矢島は10月18日、「夜は演説にて、私と英国のレデー、ドローシー、ハワード此度会頭に当選せられし婦人の代理として来られし令嬢と他の一人演説をいたしました。集会者二千余名でありました、……略……私共は廿三日の夜まで此地を見物し一寸合衆国の大会に出席し、ニューヨーク、フヒラデルフヒヤをまわりて十一月七日大統領の招待会に出席しワシントンを出発帰途に就く積りであります。……略……大会に列席して聞きしにまさる有様を見、大いに感心いたしました、この盛況を私一人でみたのは誠に残念でありまして、本部の役員諸姉の内、一人でも御覧にならばと存じました」と認めている。

28）『基督教週報』14－14（1906年12月７日）には「渡米中なりし大阪博愛社の同氏〔林歌子〕はウツドマン氏と同船にて無事帰着廿九日上京せられたり」と報じている。

29）『博愛社月報』第77号（1907年１月５日）。

30）『博愛社月報』第78号（1907年２月５日）。

断の祈によりて齎らせる此の喜びを長なへに銘記せんとするものなり」と論じている。

一方、大阪婦人矯風会は1906年12月８日に第８回年会を開催し、林歌子会頭、副会頭の職を置きそれには長田しん子が就任した。そして翌年に入ると新しい事業に手がけていく。すなわち「大阪婦人ホーム」の事業の開始である。翌07年３月30日、大阪市中之島公会堂において資金募集の音楽会を開催し、同時に趣意書を発表した。

> 神の為め家庭の為め国の為めにぞ尽さんと結びあひにし我儕婦人矯風会は日本に於ける大阪支部として浪華の地に生まれ出でしより満八年風俗矯正家庭教育慈善等諸般の方面に向つて力を尽し殊に日露戦役に際しては奮起して市内万に余れる出征軍人家族の訪問をなし戦地に向つては慰問状を寄送して兵士を慰めなどして聊か微力を捧たりし事は心窃かに喜ぶと共にまた光栄とするところなり。
>
> 今や戦後国運発展の時期に遭遇し婦人の職業を求むるの道も漸次複雑ならんとし常に人道問題のために心を注ぐ我儕は婦人に可成適当にして正しき職業を与へられん事は其の宿願なり而も其の紹介所の不完全なる事は世の等しく認むる所なり。
>
> 此時に当りて我儕は婦人ホームなる名称の下に一つの楽しき家を作りて田舎より出でて家庭の奉公口を求むる婦人をうけて之を適当なる良家へ紹介し其他職業を求むる人々のために親切なる友となり保護者となり相談相手となりて妙齢婦人の道を踏み誤る事のなきやうに併せて家庭の幸福世の便益を図るために微力を捧げんとす其ホームの設備の為に要する費用の一端に充てんと今般左の音楽演奏会を開催せんとす伏して大方有志の深厚なる御同情を仰ぐ。
>
> 大阪基督教婦人矯風会[31]

そして４月８日、臨時総会を開催し、事業開始を決定し、５月28日、発会式を挙行したのである。大阪婦人矯風会発会丁度８年である。八浜徳三郎が主事となる大阪職業紹介所が設立されるのは1912（明治45）年６月のことであり、大阪のみならず我が国において職業紹介事業の早いものの一つであり、林の生涯を代表する事業ともなっていった。

31）『感謝に溢れて―大阪婦人ホーム拡張記念―』（日本基督教婦人矯風会支部、1929）19～20頁。『婦人新報』第120号（1907年５月25日）や『博愛社月報』第79号（1907年３月５日）に趣意書が掲載されているが、文言が多少相違するので、ここでは上の著から引用した。

A Study of HAYASI Utako in the U.S.A（1905～1906）

ABSTRACT

HAYASI Utako is one of the most important social workers in modern Japan. But there have been few studies of her life and works. Her lifework had two major areas: one was the work of nurturing poor children and orphans through the Hakuaisha (the philanthropic association) which was located in Osaka. The second was the work of Japan Women's Christian Temperance Union (WCTU, Nihon kirisutokyo fujin kyouhuukai). This paper is a study of HAYASI Utako when she was in the United States during 1905～1906. There were three main reasons why she went to the USA: the first was to study social welfare institutions, especially orphanages, the second was to gather funds in order to construct new facilities for the Hakuaisha, and the third was to pursue the work of the WCTU.

She sailed to the USA on May 29th, 1905. First she visited some cities in the West Coast; Seattle, San Francisco, Los Angeles, etc. and in November she went to meet Tyng who was a pastor in Cambridge. Then she visited Washington DC, NewYork, Philadelphia, Boston, etc. There she visited to study many social welfare instututions, and lectured on the problems of Japanese women. Finally she received 6000 dollars from American charitable persons. At that time, the meeting of the world WCTU was held in Boston, so she participated with YAJIMA Kajiko. She had so many useful experiences in the USA. Then she came back to Japan on November 29th, 1906, and devoted her whole life to the work of WCTU and Hakuaisha.

Key Words: HAYASI Utako, Japan Women's Christian Temperance Union, Hakuaisya, orphanage